
雪降る夜の怪盗さん

璃玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪降る夜の怪盗さん

【Nコード】

N6438N

【作者名】

璃玖

【あらすじ】

余命を宣告され、苦しみに苛まれながら生きてきた。

——もう、終わりにしよう。

雪降る夜の道を歩く彼女が出会ったのは、一人の小さな少年と、一つの大きな奇跡だった。

(2011／8／19、改稿しました)

「…カンナ！」

母親の、泣き声にも近い声が柑奈の背に届いた。しかし振り向かず、立ち止まりもせず。

決めたことだから、歩き続ける。

「待ちなさい！ 母さん許さないんだから！」

「…母さんに許してもらわなかったいい。私はもう子供じゃないから」

肩をつかもうとするその手を、乱暴に振り払う。睨み付けた先にある、困惑と焦燥、そして絶望を映した双眸。

「……………」

視線をそらして、唇を噛み締める。

力を失い、床に倒れこむ母。

泣き崩れる母をおいて、病室を出た。

外は、雪景色だった。

クリスマスの近い街中は色とりどりの電飾でキラキラと輝いていて、どこもかしこもにぎやかだった。

吐く息は白く濁り、漆黒の闇を抱える空へと消えてゆく。

「きれい…」

肩で息をしながら街を眺めて、柑奈は小さくつぶやいた。

——もう、二度と見ることの無い世界。

柑奈の前に、歩む道はないのだった。

「こんなところで、何してるの？」

人気のない路地を歩いていた柑奈の背に、ヒトケ 声がかけられた。聞き慣れた声ではない。柑奈が生まれ育った街からは離れて位置するこの街に、知り合いなどいるはずもなく。

「可愛いね、一人？」

「こんな時間に一人なんて、危ないよー」

いつの間に近づいてきたのか、気がつけば柑奈の回りを囲むように、見知らぬ三人の男が立っていた。

あからさまに嫌な顔を浮かべ、柑奈は男たちを睨み付けた。

「…邪魔。どいてよ」

侮蔑の言葉を吐き捨て、男たちから投げ掛けられた質問すべてを無視して、歩き始めようとする。

が、前に立った男はそれを許そうとはしなかった。

「おっと。ずいぶん気丈なお姫様だねえ」

チャラチャラとしただらしない身なり、ボサボサに伸ばされた前髪の下に浮かぶ、ニヤニヤとした下劣な笑み。立ちはだかった男の異様な様子に、吐き気すら覚えた。

「…どけてんだよ！」

こみあげる敵意をわざわざ隠そうとも思わなかった。きつく握り締めたこぶしを、立ちはだかる男に向かって突き出した。

ボサボサ男は手のひらでそれをかわすと、ニヤリと笑みを浮かべた。そのまま手首を掴まれて、両手を背中に回され拘束される。

「っ…はなせ！」

「威勢が良い女は嫌いじゃないぜ、良い声で鳴きそうだからなあ」

「はな、せ…ふざけんな！」

一人が柑奈の手を、もう一人が足を押さえつける。

残った一人の手が、逃れようともがく柑奈の服のすそに触れた。

「っ——！」

「…やあ、ごめんごめん。遅くなっちゃったね」

何の前触れもなく。場にそぐわない明るい声が、暗い路地に響いた。

男たちはピタリと動きを止めると、訝しげに表情を曇らせる。顔を上げて周囲を見回し、男たちの視線はある一点に集まった。

「…ああ？誰だテメエ」

「ボク？そうだねえ、君たちにはちょっと、想像しがたいんじゃないかな」

会話にならない会話、意味深な言葉。

にっこりと笑みを浮かべる彼は、どこか幼い。今ここにいる誰よりも、この暗い路地という場に不釣り合いで、存在していることにすら違和感を覚える。

「ワケの分かんねえこと言ってんじゃないぞ！」

凶悪な表情が男の不機嫌さを表していた。乱暴な言葉を吐き捨てると、男は容赦なく少年に殴りかかった。

「あぶないなあ」

鼻の先すれすれのところで、しかし軽がるといった様子でこぶしをかわした少年が、眉根を寄せて少し困ったような顔をする。

「すぐ暴力に走るのって、人間のなかでも一番サイテーだよね」

「舐めやがって、クソガキが！」

男の神経を逆撫でするような言葉と声音に、男たちは単純なほどに反応して怒りを露にする。怒りに狂ったボサボサ男が、握りこぶしをメチャクチャに振り回して暴れだした。

少年はというと、どこか楽しんでいる様子すら見受けられて。男の拳をギリギリのところまで全てかわして、髪の上にすら触れさせなかった。

「どうかな、気は済んだかな？」

「…どこまでもナメた口ききやがって…叩きつぶすぞ！」

ぜいぜいと荒い息のままわめき散らす男は、まるで猪のようだった。

「だよね、そう言うと思った。でもボク、そろそろ疲れてきちゃったんだよね」

汗一つかかずに朗らかな口調で言う少年は、とても疲れを感じているようには見えなかった。

「その子、返してもらえる？」

穏やかであつたはずの少年の声が、柑奈の耳に鋭く響いた。脳みそまでも貫くような耳鳴りに、柑奈はめまいを覚える。

「うっ、うわああっ！耳がああ！」

柑奈の体を拘束していた男が、狂ったように叫び声を上げた。

投げ出されるように体が解放されて、柑奈は降り積もった雪のうえに、崩れるように膝をついた。

目の前に広がるおぞましい光景に、目を見開いたまま硬直する。

「…っ…」

男たちの耳からは赤い血が吹きだしていた。痛みにもだえ苦しみ、耳に手を当ててあふれる血を押さえる男たち。指の間からしたたり落ちる血が、真っ白の雪に点々と染みを作っていく。

「さ、行こう」

少年は柑奈のガクガクと震える体を支えて、ゆっくりと立ち上がらせる。柑奈はそのまま少年に手を引かれる格好で、痛みにうめく男たちを置き去りにしたまま、路地をあとにした。

柑奈と少年は、古びた時計塔にのぼった。街の建物の群れから、

一つだけ飛び抜けるように高くそびえる時計塔だった。

時計塔の一番上にある展望台は、雪をしのげる屋根はあっても風を防ぐ窓はなく。吹き抜ける真冬の風が、容赦なく柑奈の体温を奪っていった。

両手で肩を抱いて、震える体を丸める。

「着る？ボクのでよかったら」

少年はそう言うと、ジャケットをするりと脱いだ。はじめから柑奈の答えを聞くつもりもなかったのか、それを柑奈の肩にかけた。

「…あんた、死神？」

寒さによる震えか、はたまた別のものなのか。

柑奈の指先が、小刻みに震えていた。

「ボクのこと、怖いって思ってる？」

肯定も否定もしなかった。柑奈は、小さく笑った。

「……いつ死んだって良いって、思ってたのにな」

——どうせ、ひと月もしないうちに尽きる命なのだからと。

「なのに…」

怖くてたまらなかった。

命を奪われていくような光景を目の当たりにしたことが。近いうちに、それが柑奈自身に降り掛かろうとしていることが。

「…あんたが死神だったらって…怖くて体が動かなくなって…」

覚悟していた、つもりだった。
もう十分だと思ったのに。

「…まだ生きていたいなんて、思ったりして…」

そんな自分自身を見つけてしまったことが、何よりも。

悲しくてたまらなかった。

「…私の命を取りにきたなら、早く済ませちゃってよ」

「んー？」

少年はとぼけたような声を出した。

「わかったた、もう体が持たないことくらい。こんな真冬に外に出たりしたら、死んじゃうことくらい」

絞りだしたように話す柑奈に、少年は小さく笑った。

「ねえ、良いもの見せよっか？」

「……？」

少年の話や行動には脈絡がなく、先の読めない迷路のように、人を惑わせる何かがあるような気さえしてくる。

しかし不思議なことに、そのあっけらかんとした明るさや突飛な言動に、穏やかになる自分がいる。いたずらな言葉や行動で人の心を惑わす、雪の妖精のよう。

柑奈は無言のまま、少年の姿を目でおいかけた。

「…君の中にある、輝きを一つボクにちょうだい？」

「…え…わっ！」

少年の指先が、柑奈の中心を指した、次の瞬間。胸の辺りから光があふれた。驚きから思わず目を閉じる。

光がおさまったとわかってからゆっくりと目を明ければ、柑奈の目の前には、七色に淡く輝く光の玉が浮かんでいた。

「きれい…」

青色であったり赤色であったり、さまざまに変わりゆく玉の色に柑奈は目を奪われた。

さわれるのかなと指を伸ばすと、触れた先からパチンとやわらかく弾けて、光の粉が舞った。

「……これ、私の中にあったのかな？」

「そうだよ、君の中の輝き。きれいでしょ？」

「…すぐく」

こんなにきれいな光が、自分のなかに秘められていたのだと思うと、それだけで声も出せないくらいに嬉しかった。

もうすぐ、消えてしまう命。

脆く、儚かった、小さな命。

思い通りにならなくて疎んじたことが、一体どれだけあったか分からない。

「…生まれなきゃ良かったのにつて、思ったこともあったんだ」

身体に病気が見つかって、命の期限が伝えられたのは二年前。もう、どうあがいても、生きていられないのだとわかった日。

「死んじやいたい、つて。こんなに悲しみしかない人生だったら、無いほうが良かった」

「そっか。そしたら、君は何だったんだろうね？」

何にもないように話す少年に、柑奈は思い切り吹き出していた。

「生まれてこなかったら、こんなこと、思ってもないよ。そうでしょう？」

「そっか、そうだね。生まれてないんだから」

生まれてなかったら。

考えることも、できなかった。

生まれてこなければ、なんて、思うこともなかった。
反対に、生きていたいと思うこともない。

「…生まれなければなんて言っても、それでも——生きていたいって思っちゃうのは、ずるいかな？」

少年は、ちょっとしたことを考えるかのように、少しだけ首を傾げる。

三秒もたたないうちに、にっこりとほほえんだ。

「要するに、生まれてきて良かったってことなんじゃないかなあ」

あまりにもあっさりと答えられたことに、釈然としない何か柑奈のなかに残る。

文脈もなにもない。後にも先にもつながらない。どこか少年らしいとも思えてしまう、何とも不思議な答えだと思った。

「…病気になっても？」

柑奈が問えば、少年はやはり微笑んだまま。

「病気にならなかったら…それは君じゃないでしょ？」

「……………」

生まれなきゃ良かった、も、ありえない。

すでに生まれているから、考えることができるのだから。

病氣にならなきゃ良かった、も、同じこと。

病氣になっていなかったら、そんなことは思いもしなかったはず。

笑いが込み上げてきて、我慢せずに柑奈は吹き出した。

「へんなの。もうすぐ死んじゃうのにね、私」

少年は、ただただにっこりと笑っているだけ。何も言わない。

「病氣が治っちゃったらしいのにね」

聞いているのかなんて、わからなかったけれど。

誰に言うでもなく、つぶやいた。

「きっと、きれいな色をしていると思うよ」

「…?…そうかな」

「うん」

身体をむしばむ苦しいだけの病氣が、もしもあんなふうに、七色の輝きを放っているのだとしたら。

それはそれで、良いのかもしれない。

頭に浮かんだ変な考えに、柑奈はやっぱり笑った。

「…あ、もう行かなきゃ」

よいしょと立ち上がって、膝や肩についた雪を払った。

「君は？」

「…うん、もう少しここにいようかな」

「そっか」

少年は笑って、柑奈に手を振ってみせた。

「また会えるといいーね」

「…うん、そうだね」

あいまいに答えて、柑奈も手を振り返す。

また。

また、生まれ変わったら。

タン、タンと軽い音を立てて、少年は時計塔から降りていった。

「名前、聞いておけば良かったかな」

そんなことを考えてしまってから、ふと笑う。

不思議だった。また、逢えるような気がしてしまったから。

急に眠気が襲ってきて、重くなる目蓋をゆっくりと閉じた。

——ああ、もう、終わりか。

笑ってしまうくらいに、静かで落ち着いている心。
苦しみもなかった。

最期の最後で、柑奈は自分自身と、病氣と向き合えた。
後悔は、ない。

私の命は、どんな色をしているのだろうか？

暗くなる意識の端で、そんなことを思った。

「行ってきまーす」

足にくつを引っ掛けて、慌ただしく玄関の扉を開く。

「待ちなさい、お弁当!」

母がリビングから叫んで、駆け足で玄関までやってきた。その手には、小さな包みが一つ。

「まったく、慌てるくらいなら、もっと早く起きなさい?」

「小言はあとで聞くから。ありがと、母さん」

「いってらっしゃい、柑奈! 気を付けるのよ」

母の声に片手をあげて答えながら、柑奈は家を飛び出した。

「柑奈! おはよー」

あの雪の日の不思議な出会いから、半年がたっていた。

「あっちゃん、おはよ。遅刻しちゃうよ」

「うん、だから走ってる」

「そっか」

あの時計塔で意識を失ったあと、柑奈は塔の管理人さんに発見されて病院に搬送され、一週間も昏睡状態にあったという。

目が覚めたとき、母や父、たくさんの医師や看護師がいたことを覚えている。だれもが、信じられないような顔を浮かべていた。

「でもよかった。柑奈と、また学校に行けるんだもん」

「うん、そうだね」

余命まで宣告されていた半年前の自分とは、まるで別人のようで。

「…雪の日にね、ちよつと早いクリスマスプレゼントをもらったんだ」

「へえ、サンタさんに？」

「うーん…」

柑奈は、小さくうなる。

雪の降る夜。

柑奈の中にあつた、輝きを奪っていたあの少年は。

「怪盗さん、かな？」

「怪盗？変なの」

「いーの、変でも何でも」

きらきらに輝いた柑奈の病気を奪ったのは、一人の少年だった。奪った以上に、与えられたもののほうが多かったのだと知ったら。

——ねえ、君は笑うかな？

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6438n/>

雪降る夜の怪盗さん

2011年10月3日05時50分発行